

「あ！萌え」の構造（番外編その6）

物語としての夢（Dream as a Narrative）

総合心理学部 齋藤清二

1. 夢の中の浴槽

若いころ、頻繁に浴場の夢をみた。たいがいの場合、その浴場は地下にある。

私は夢の中での意識性が高い方なので、多くの場合は、自分が夢の中にいることが分かっており、建物の廊下などを歩いていると、下降する階段を見つける。そうすると「下りてみようか」と思う。

その階段を地下に下りて行くと、だんだんと灯りが暗くなっていく。そして、一番下の階までたどり着くと、そこに大きな浴場の入り口がある。「やはりここまで来たのだから、入浴するべきだろう」と考え、脱衣場で服を脱いで、風呂に入ろうとする。

浴場は大概の場合暗いのだが、湯煙が立ちこめていたりして、リアルである。湯に浸かっている肌の感触や湯の熱さなどは、現実の感覚に負けないくらい鮮明である。大概の場合、湯に浸かって、湯の感触を楽しんでいるうちに目が覚めてしまったり、あるいは、夢の場面が転換して別の夢になってしまったりする。

さて、このような夢が「何を意味しているのか？」というのも興味のあることではあるが、それは別の時に考えることにして、ここでの問題は、現実と同じくらい、あるいはそれ以上に現実的な、この入浴の体験とは、いったいなんなのだろうか？という疑問である。

そもそも、そこには、物理的な湯船は「存在しない」。これは全く確かなことである。つまり私が全身で感じている湯の熱さ、湯の感覚、そして浴場の情景、時にはそこで聞こえる音まで、そこにはその体験を生じせしめる「物理的対象」はない。しかも、私は布団の中で眠っているのであるから、私の眼球や三半規管や皮膚の感覚受容器は働いていないはずなのだ。

それにも関わらず、私は明らかに入浴を「体験」している。この「物理的には存在しない入浴の体験」とは、いったいどこから来るのか？しかも、目覚めていくと同時に、湯の感触、湯煙、浴場の情景、大げさに言えば私を取り巻いていた世界の全てが一瞬にして存在しなくなり、私は布団の中にいる自分を発見するのである。

・・と、まあ、どうしてもそういうことを考えてしまうわけで、私が体験している「入浴」とは、「それは単なる過去の記憶の残渣なのです」という説明も「単なる幻なのです」という説明も、私の全身の感覚を納得させることはできない。しかし「いや、それは実在する別の物理的世界なのだ」という説明も私は採用する気にはなれない。そう、それは「主観的現実」なのだ。そういう説明を私は採用する。最近だと「脳内現象」という人が多いのだろうか。

解深密教という教典によれば、「三昧中に現れる影像は、全てが『識の顕現』である」と釈迦は言ったとのことだ。そして驚くべき事に、私達が通常体験している現実も、それと全く同じく『識の顕現』であると釈迦は主張した。

つまり、夢の中で体験する入浴も、現実には黒部峡谷で体験する入浴も、ともに「識の顕現」である、と仏教は考えるということだ。

・・で、まあ、繰り返しになるが、上記に述べたような夢の中での入浴体験と、先週の露天風呂との体験には、本質的な差はないような感覚を、現在の私は持っているのである。たぶん、最近では現実の世界で入浴を楽しむことが多くなったので、夢の方での浴場はあまり必要が無くなったのかも知れない。

## 2. 切断の夢

もうずいぶん昔になるが、原因不明の腹痛のために不登校に陥ったA君が、以下のような夢を報告してくれたことがある。

**夢：**大きなカッターナイフを左手に持って歩いていると、特に切りつけた訳でもないのに、近くを通る人の腕が切れたりして傷つけてしまう。その後、学校へ行き、まわりを傷つけた犯人が自分であることがまわりに分かってしまうので、カッターナイフの刃を隠そうとするが、ノブが大きすぎて戻せない。そこで目が覚めた。

この夢には、「切断」のテーマがはっきりと現れている。おそらくこの夢には、どうしてA君が不登校に陥ったのかという理由が表現されているように思われる。

A君は左手に大きなカッターナイフを持って歩いている。もちろんカッターナイフは切断する機能を表す。「切断する」とは「切り分ける」ことであり、意識の持つ「区別する」「分節する」機能を表す。意識は区別をすることなしには、何も認識することはできない。従って「切る」ことは意識の持つ基本的な機能である。具体的には、善悪、正邪、好き嫌い、美醜などの差異を区別し、認識するという形で、意識の切断機能は発揮される。意識の「切断する」機能は、ロゴス（理性）の機能として表現される。ロゴスを司るのは「天なる父」である。

ところで、この意識の持つ切断の機能は、あまり強力に発揮されると、「切り捨てる」「切り殺す」作用として働く。「天なる父」は、羊の群の中に一匹でも悪い羊がいると、その群は良くないという理由でその群の羊を全て殺してしまったりする。悪徳と墮落の街であるソドムとゴモラが天罰により滅びたりするのもその例である。

これに対してエロス（愛）は、むしろ「つなぐ」「結びつける」機能である。前者は男性的機能とされ、後者は女性的機能とされるが、もちろん必ずしも現実の性役割と一致するとは限らない。

ところで、A君はナイフを左手に持っている。左は一般に無意識を表し、左手は意識が知らないうちに行動する。左手のすることを右手（意識）は知らないのである。この結果A君自身がそのつもりがないのに、とおりにすがりの人々を傷つけてしまうということが起こる。あまりに鋭い切断能力を発揮すること——例えば他人を評価すること、批判することなどはすべてこれにあたる——は、往々にして他人を傷つけてしまう。この問題は、ロゴスの機能をたまたま他人より発達させている子供にとって、学校という集団生活適応にしばしば問題をもたらす。

日本の文化的集合的意識は、物事を厳しく明確にして行く態度を、表面上は推奨するように見えて、実は排除しようとする傾向が極めて強い。「事を荒立てない配慮」や、「他人の欠点をあえて指摘しない配慮」などが集団の中では要求され、理屈っぽすぎる態度や他人に容赦のない態度をとる子供は集団から浮き上がってしまう。

ある時期にこの事に気が付いた子供は、自分の本来の性向である「区別する力」を無理に抑えるか隠すことによって集団に適応しようとする。これが、この夢の中でA君がしようとしていることである。カッターナイフの刃をひっこませることによって、すなわち自身の能力を隠すことによって、この問題は回避されるように見える。しかし、A君にはそれはできないのである。なぜなら、それでは自分自身の本性を殺すことになるからである。

おそらく、学校という場合は、A君にこの葛藤に直面することを迫る場なのである。それがあまりにも重い、解決不可能な葛藤なので、A君は学校へ行けないのであろう。A君は、この解決不能の葛藤の解決を、直接的対人関係の中ではなく、家に閉じこもることによって一人でやり抜こうとしていると考えられるのである。この葛藤はあまりにも深いので、A君自身はほとんど全くこの問題を意識化していなかったと考えられる。この時点になって初めて、ようやくA君はこの葛藤を夢に見ることができるようになったのである。しかし、結局この葛藤が直接言語化されることはなかった。A君の魂は、この問題を、身体化とイメージのレベルで解決する道を選択していたのである。

ところで、この意識の機能としての「切断」のテーマを追求する物語として、手塚治虫の「ブラックジャック」が挙げられる。

ブラックジャックの主人公「黒男」は、子供の時爆発事故に会い、五体バラバラとなり、瀕死の状態となるが、医師により五体を「つなぎ合わされる」ことにより、一命を取り留める。この生い立ちにすでに、身体切断と再生のテーマが見て取れる。これは、エジプト

神話におけるオシリスの殺害と再生に等価の物語である。

彼は後に天才的な外科医となるが、医師免許を取得せずに、アウトローの道を選ぶ。彼は天才的外科医として、ほとんど奇跡的あるいは魔術的とも言うべき「切断」の能力を発揮し、他の医者が救えない患者を次々と手術により救っていく。

彼の能力は実は「切断」とともに「つなぎ合わせる」能力なのである。なぜならば、外科医が患者を救うためには、「切り取る」だけではだめで、「縫合する」技術を要求されるからである。しかし、彼は常に葛藤状況におかれることを余儀なくされる。一つは彼をアウトローとして認めない社会がもたらす迫害であるが、彼自身はそのような社会から離脱した個（それは悪人として表現される）を確立することによってそれに対処する。

しかし、もう一つのさらに根元的な葛藤には、さすがの彼も抗し得ない。それは、如何に切断と縫合の能力を発揮しようとも、人間の生死の運命はそれを越えたところにあるという事実が彼にもたらすものである。この真理は、例えば彼がその奇跡的な手術の技術を駆使してようやく治癒せしめたと思った患者が、何らかの偶然によりその直後にあつげなく命を落としてしまうというようなエピソードが繰り返されるといって、彼の前に現れる。

その事実と直面したとき彼はこう叫ぶ。「それでも私は切るしかないのだ」。この叫びは、人知を越えた真理（それは人生における徹底的な非条理とも言えよう）に直面し、自身の限界を思い知らされた時に、なお誇りを失わない自我意識の悲痛な叫びであり、意識的に生きようとする全ての人々により共感される叫びでもあるのだ。

### 3. 双子の死

原因不明の腹痛のために不登校に陥った A 君が、治療の後期にとっても長い印象的な夢を見た。その夢の最後の場面で、A 君は以下のような体験をしつつ目覚めた。

夢：・・・なぜか僕は大きなコーヒーの瓶のような容器に、白い固まりの入ったものを二つ渡され、どちらにしようか迷っているうちに目が覚めた。不思議な夢だった。

ここで、A 君は不思議な二つのものを示され、どちらかを選ばなければならない。その二つは、はっきりと見分けることが難しいほど良く似たものである。この、「ほとんど見分けがつかないほど良く似た二つのものから一つを選択する」というモチーフから、「双子の片割れの死」というテーマを連想することは、さほど唐突とは思われない。

双子のテーマは、神話、伝説に非常にしばしば認められる。双子座の神話のカストールとポルックスは、白鳥に姿を変えたゼウスと交わったレダの卵から生まれた双子の兄弟であるが、ゼウスを父とするポルックスは不死であるのに対して、カストールは人間を父と

しており、死すべき運命を持っている。二人は協力して色々な英雄的冒険をするが、最後にカストールは死に、不死のポルックスは双子の兄弟の死を嘆き悲しむ。これを哀れに思ったゼウスは、二人を一緒に天空の星座とすることにより、双子に永遠の命を与えるのである。

元型は、それ自体を体験する事も把握することもできないが、元型的なイメージが意識化される時、もともと元型が内包している二律背反性が、相いれない矛盾したものとして、意識には認識されるようになる。

例えば、永遠の少年の元型は、それ自体は本来良い物でも悪い物でもないが、それが意識化される過程で、分裂し、一方は全能で創造性に満ちた神的な少年イメージとなり、もう一方は幼児的で成長することなくいつまでも幼稚な無能な子供イメージに留まる。意識の成長の過程において、分裂した双子イメージの一方が死ぬことは、おそらく避けられないことなのであろう。このような例は、メソポタミア神話におけるギルガメシュとエンキドゥなど、枚挙にいとまがない。

萩尾望都の初期の作品の中で、この双子の少年の一方の死のテーマは、極めて魅力的に描かれている。短編である「11月のギムナジウム」では、別々に育ったエーリックとトーマの双子のうち、トーマがあっけなく死ぬことにより、エーリックは自身の出生の秘密を知ることになる。

ところが、このテーマを発展させた長編である「トーマの心臓」では、トーマは物語の最初にすでに高架橋から身を投げて自殺してしまっている。物語の主人公は、最終的にはトーマの死と、エーリックの愛によって救済される黒髪の少年ユリスモールである。しかし、ユリスモールは最終的には神学校へ進み、俗世間との関係を絶ってしまう。

萩尾望都の別の短編である「半神」では、このテーマがさらに深化された形で描かれている。この作品では、主人公はシャムの双子であり、一方は天真爛漫で、全てを与えられている美しい少女であり、もう一方は神経質で醜い少女である。しかし、肉体のつながりを切断される手術を受けた後、美しい少女は栄養摂取の道を絶たれ、やせ衰えて餓死してしまう。今は、栄養豊かな愛らしい少女となった、残された片割れは、自分の半身の犠牲的な死に深く涙し、失われた半身・半神を弔うのである。

あだちみつるの人気漫画作品である「タッチ」では、双子の兄弟、達也と和也が主人公である。弟の和也は、学業もスポーツも超一流で性格も一点の非もない優等生である。兄である達也はそれに比べると平凡な存在である。二人の幼なじみの南は、これも申し分のない美少女であるが、和也と達也の二人の好意の間で揺れる。しかし、和也は甲子園大会の決勝を目前にして、交通事故で急逝してしまう。ドラマの詳細は省略するが、この和也の死によって、達也と南は、それまでの優等生的な失感情的な生き方から自然な人間性を取り戻し、成長していくことが可能になるのである。

双子の片割れの死の物語は、必ずしも単純ではなく、色々なバリエーションが存在する。これは、普遍的な無意識層に属する元型的な心的内容が意識化される時に生じるドラマが

多様であることを意味する。失われた自らの半身の死を受け入れることができずに、天上の世界へ去って行ったポルックスの物語が、必ずしも我々人間の世界に生きるものにふさわしい物語であるとは思われない。それは無意識を人間的な意識に同化することの失敗のドラマであるかも知れない。

私達が人間界で生き続けるためには、自らの半身の死を、深い悲しみをもって受け入れることが必要なのかも知れない。

#### 4. 追われる夢

原因不明の腹痛によって不登校に陥ったA君が、治療開始直後に語ってくれた夢である。

**夢：**暗い夜道を一人で走っている。後ろから何か追いかけて来るが、前しか見えず、ひたすら走っている。

これは印象的な夢である。何者かに追いかけられる夢というのは、印象夢としては頻度の高いものである。一般に、このような夢は恐怖を伴う悪夢であることが多い（だから印象に残る）。よくあるパターンの夢は以下のようなものである。

何か正体のわからない、恐ろしいものに追いかけている。何とか捕まらないように必死で逃げているのだが、足が重くていまにも追いつかれそうになる。しかし、何とか追いつかれる前に目が覚める。目が覚めると冷や汗をびっしょりとかいており、胸は動悸で高鳴っている。やれやれ、夢で良かった。追いつかれなくて良かったと思う。

元型心理学の論客であるギーゲリッヒは、このような夢の意味の解釈を、自我の立場からではなく、夢それ自身の立場から考えて見ることを勧めている。自我意識の立場からみれば、何か得体の知れない怪物のような存在が追いかけて来るのだから、逃げるのは当然だと感じる。逃げ仰せることができ、やれやれとほっとする。こんな嫌な夢は二度と見たく無いと思うし、もし見たとしたら、今度も逃げ延びなければと思う。

では、夢の立場から見たらどうなるだろうか。自我は追いかけられるから逃げるのだと主張する。しかし、夢の立場から言えば、自我が逃げるから追いかけるを得ないのである。自我が逃げれば逃げるほど、夢の追跡は激しくなる。しかし、もし自我が逃げることをやめて、振り向き、追いかけてくる者と対峙したら、何がおこるのであろうか。夢が望んでいるのはそういうことであるかも知れない。

はるか昔のことであるが、極めて多彩な身体症状に苦しめられている男子大学生B君から定期的に夢を聴取する機会があった。夢の中で、彼は常に何者かに追いかけていた。最初それは、正体不明の巨大な存在であり、彼は夢の中でありとあらゆる手段をとって逃走し、最後には空中に飛び上がることによってその追跡者から逃れるところで目が覚める

ということを繰り返していた。

継続的に夢を聴取するうちに、追跡と逃走のパターンは変わらないものの、しだいに追いかけるものが変化しはじめた。最初、それは正体不明の巨大な存在であったが、次には、刀を持った二人の僧侶となり、ついで、いつも彼が怖いと感じている大学教授になった。それでも彼は夢の中で常に逃げ、捕まる直前に目覚めてほっとするのであった。ついで、追跡者は、仲の良くない友人となり、その友人と夢の中で言い争いをするまでになった。そして、ついに、夢の中でB君を追いかけて来たやくざと彼は銃撃戦を展開し、B君は胸を銃弾で打ち抜かれて死んでしまう。

不思議なことに、夢の中でこの強烈な体験をした直後から、彼を悩ませていた多彩な身体症状はほぼ完全に消え失せてしまった。もちろん、これでB君の問題が全て解決したわけではなく、その後も展開があったのだがここではこれ以上述べない。

B君の例は、夢のなかで何者かに追いかけられるというテーマの一つの展開を示すものである。この例から、以下のような可能性が示唆される。夢の中での追跡者は、自我意識と何らかのコミュニケーションを求めて迫ってくる無意識の総体である。無意識の接近は通常自我に強い恐怖感を与えるので、自我意識はこれを避けて逃げようとする。すると無意識はさらに強い手段をもって自我に迫る必要が生じてくる。この接近の手段が、強烈な印象を持った夢であったり、通常の医学では説明不能の多彩な身体症状であったりするのではないだろうか。

B君の例では、自我が追跡する無意識につかまり、銃で撃ち殺されるという体験をする（これも一つの意識と無意識のコミュニケーションである）ことにより、身体症状はそれ以上必要がなくなり、消失したのであると解釈することが可能である。つまり、無意識がこちらを見ようとしないうちに自我意識にこちらを注目させるための信号の役割を、多彩な身体症状と悪夢が担っていたと考えられるのである。

## 5. UFOの夢

原因不明の腹痛によって不登校に陥ったA君が、治療開始後半年くらいたってから報告してくれた夢。

**夢：**家のベランダ（南側）にいと、空の三分の二位を占める大きなまぶしい光を放射状に放つ物体（本体は虹のように多色）が浮かんでいる。背景は真っ赤。UFOだと思い、怖くなって北側の窓の方へ行って空を見ると雨である。2階からではなく、高層ビルからの景色のようだった。怖くなり目が覚めた。

UFOの夢である。A君はこれに似た夢を、今までに数回以上見ているという。同じテーマ

を繰り返し夢に見るということは、そのテーマがA君の内界において重大な意味を持っており、かつそれに関する物語が完結していないことを表す。

さて、A君の夢に現れた UFO は、空の3分の2を占めるような巨大な虹色に変幻する円形の物体で、まばゆいばかりの光を放射状に放っている。この物体は夢の中でC君に強い畏怖の感情をいだかせている。ユングは、その著書のなかで、「UFO は現代人の心の中から自発的に出現する、全体性の象徴（自己）である」と述べている。このようなイメージは、人間の自我が偏った発達をして、無意識も含めた心全体のバランスが失われる危機が生じたとき、再び心の全体性を取り戻すために、その姿を現すとされている。

筆者はかつて、胃症状に強い固着を持ち、対人恐怖のために不登校に陥った大学生C君と5年にわたる心理療法の体験を持った。C君の心理療法が、長い経過ののちによりやく展開を迎え、元型的な夢が出現し、症状の劇的な軽快が起こった前後、彼は UFO を目撃した。彼は面接中に淡々とその体験を語り、筆者も淡々と聞いた。お互いにその話の真偽については興味がなかった。その体験の意味は言葉では表現されなくとも双方に理解されていたのである。

過食嘔吐を伴う神経性食思不振症の女子高校生Dさんが報告した夢に、以下のようなものがあつた。

**夢：**私の目の前に視野の3分の2以上を占める巨大な目が浮かんでいる。背景は真っ暗で、それ以外は何も見えない。その目は私をじっと見つめているようである。私はとても怖くなり、目が覚めたらびしょりと汗をかいていた。

Dさんはこの前後、体重減少の極期にあつた。この前後に彼女は以下のような体験を治療者に語ってくれた。Dさんは病棟のデイルームで、他の患者さんと1時間ほど話をし、自分のベッドにもどつた。すると同室の患者さんが、「さっきはいったいどうしたの？」と尋ねる。何のことか分からないので問い返すと、「さっき、あなたは突然部屋に入ってきて、自分のベッドの上で体操をして、まわりの人が話しかけても何も答えず、また出て行ってしまった。いつもの様子と違ったけれど、いったいどうしたの？」と言われた。Dさんはたいへんびっくりした。彼女にはそのような行動をとつた記憶が全く無いのだ。そこで、それまでデイルームで話していた別の患者を連れて来て尋ねると、その時間帯には彼女とまちがいなく一緒にいたと証言する。結局何が何やら分からず、「それでは、さっきのは幽霊だったのではないか」ということになった。とても怖く感じて、Eさんはその晩は一人では寝付けなかつた。

このエピソードは現実にはあり得ないことで、もし合理的に説明しようとするれば、誰かが嘘をついているか、勘違いしているかとはしか考えられない。しかし、これを彼女の心理的側面から考えると、この体験は一種の解離現象を表し、周囲がそれに巻き込まれている



可能性が考えられる。現象学的には、Dさんは「二重身」の体験をしたことになる。

このような体験が生じる時には、主体と客体の区別が曖昧になり、自と他の相互浸透が起こる。これは、意識水準の観点からみれば、あきらかな水準の低下状態と考えられ、比喩的には、自己の元型に支配されている状況と考えられる。実際の経過では、この頃より、突然の食欲増加が出現し、その後しばらく紆余曲折を経るが、結局約1年の経過で神経性食思不振症の状況は改善し、Eさんは大学へ進学した。ここで、Dさんが夢の中で直面した「暗闇の中の巨大な目」は、A君の夢の「虹色にきらめく巨大なUF0」と、共通性を有するイメージであると思われる。

さて、A君がUF0と出会うとき、彼は建物の上の階にいる。そこは2階であるはずなのだが、もっとはるかに高い高層ビルのものである。建物は一般に心の構造を表し、高い場所ほど精神性が高いと考えられる。元来UF0は遥かなる宇宙すなわち上方から飛来するものであるから、どちらかという精神性、男性性、意識性の側面をより強調するものと思われる。あまりにも高すぎる精神性の飛来は、時に、自我にとって破壊的な作用をもたらす。統合失調症患者の妄想にしばしばUF0が登場するのも、この理由によると思われる。

南側の窓からUF0と対面したA君は、反対側の北の窓から、今度は降り注ぐ雨を見る。雨は天と地を結ぶ無意識のエネルギーの流れであり、地上に降り注ぐ雨で象徴されるエネルギーの流れは、自我がUF0によって、さらなる高みに連れ去られる危険性を補償しているように思われる。これらの夢は、以前から繰り返し見られていたものであることから、このような自己の象徴の付置は、A君の問題が顕在化する以前よりすでに存在していたのだろう。